天津神社は第12代景行天皇の御代に創設にして第36代孝徳天皇の勅願所と寛文2年(1662)改築の拝殿(5間×7間)棟木に記されている。尚幣殿(3間×3間)が天明2年(1782)に増築されている。並んで祀る奴奈川神社は延喜式内社頸城十三座の一社であり、併せてこの地方の大社である。

●天津神社本殿

天津神社の祭神は、中央に天津彦々火瓊々杵尊(あまつひこひこほにに ぎのみこと)、左が天児屋根命(あめのこやねのみこと)、右が太玉命(ふとだまのみこと)の三柱で伊勢神宮外宮相殿の祭神と同じである。

天津神社の本殿(2間半×3間)は、寛政九(1797)年に改築されている。欄間の彫刻や縁下の組物などは見事である。建物は、総欅造りであり、棟梁は糸魚川の住人、相馬十郎左衛門昌信である。

●奴奈川神社本殿

奴奈川神社の祭神は、奴奈川姫命で後年に八千矛命を合祀した。

天津神社本殿と並んで、西にある奴奈川神社本殿(1間4尺×2間)は、寛政十(1798)年に改築されている。

糸魚川市蓮台寺の奥・柳谷にあったが、元暦二(1185)年秋に山崎の地に移り、その後現在地に移ったと伝えられる。

●子聖社(ねのひじりしゃ)

天津神社の末社(1間×1間3尺)で創設などは不詳であるが、足腰など下半身の病に霊験があると言われ参詣者が多い。

平成15年6月改築

●神宮寺

一の宮(天津神社・奴奈川神社)は、古くからこの地方の大社で、神仏混合の時代から高峰山教王院神宮寺(古義真言宗)と言う寺が境内にあり、江戸幕府から寄進の御朱印地100石(上刈地内)を支配し、一の宮の修覆や祭礼を行なってきた。明治維新の神仏分離政策によって、神宮寺は廃され、仏教的色彩はすべて払拭された。当時の面影を偲ぶには、市内経王寺に残る「天津社神宮寺」の銘のある梵鐘や宝伝寺門前に並ぶ石仏群、一の宮宮司宅前の井戸などがある。

駅からのご案内

表参道

拝　殿

衣紋所

天津神社社務所

〒941-0056　新潟県糸魚川市一の宮1丁目3番34号

TEL　025(552)0036

http://www.fsinet.or.jp/~amatsu

一の宮

天津神社(あまつ)・奴奈川(ぬなが)神社

拝殿

一鎮座　糸魚川市一の宮一

天津神社春大祭

〈一の宮 けんか祭り〉

天津神社春大祭は近年、〈けんか祭り〉として知られているが、近郷近在では、昔から〈十日の祭り〉と呼ばれ、春はこの祭りを境にかけ足でやってくる。

10日午前零時太鼓を打ち、祭りの始まりとなる。4時神輿堂より出された二基の神輿は舞台に安置される。9時頃、潔めた身にハッピを羽織った、押上・寺町両区の若衆が鶏爺を先頭に一の宮へと登社する。やがて神輿は舞台を離れ、押上・寺町の白丁にかつがれ、お練りという行列をつくって神苑を巡幸する。

このお練りが神苑を1回半まわると、神主と稚児はそれぞれ拝殿、舞台へ上がる。それと同時に二基の神輿は猛然と走り出す。いよいよ神輿の競合が始まるのである。勝てば、その年が豊漁、豊作であるといわれている。

押上は緋色のハッピ、寺町は萌黄色のハッピの手引にひかれ、神輿は走る。やがて太鼓の音につれて、二基の神輿は、ガップリと組むのである。

激烈な“けんか”が数回くりかえされ、疲れ切った頃合いを見計り、舞台に押上・寺町両区の代表が上り、その合図により、太鼓の音がドンデンドンに変わり、御走りとなる。一の神輿が幣殿に上がるところを二の神輿が見つけると一の負け、二の勝ちとなる。

やがて“けんか祭り”の“動”から、神苑は、舞台上の“舞楽”の“静”へと変わっていく。

国指定 重要無形民俗文化財 糸魚川の舞楽

〈天津神社舞楽〉 （昭和55年1月28日指定）

1.振鉾（えんぶ）童舞二人
舞楽の初めに舞うもので、天冠を頂き、鉾を両手で捧げ、二人が同時に舞う。

2.安摩（あま）童舞一人
南方伝来の林邑楽とされ、面帽も面も装束も異国風で、手に桴をもち、4～6歳の稚児が舞う。

3.鶏冠（けいかん）童舞四人
鶏冠をかぶり、胡蝶を背負い、菊の花を持って舞う。四人の稚児が花に遊ぶ蝶のように平和で美しい。

4.抜頭（ばとう）大人一人
奈良時代に南方より伝来した林邑楽と言われ、父の仇の猛獣を捜し求め、格闘の末、討ちとり喜び勇んで山を下る様を表すという。

5.破魔弓（はまゆみ）童舞四人
頭には巻纓に緌をかけた冠をつけ、装束は弓手を付け、太刀をはき、弓と矢を持って、悪魔退治をするという舞である。

6.児納曽利（ちごなそり）童舞二人
稚児による納曽利舞で、面の表情も童児らしくてやさしく、丸形の面帽子もおもしろく、振り袖姿も優美である。

7.能抜頭（のうばとう）大人一人
天津神社独得の舞で、腹をふくらませ、能楽の翁面に似た面をつける。尖がり帽子と白の小袖に巴紋を付けている所など、すがすがしい装束である。

8.華籠（けこ）童舞四人
天津神社独得の舞のひとつで、四人の美しい装束の稚児が籠に盛った花を撒きながら舞う。

9.大納曽利（おおなそり）大人二人
朝鮮伝来の高麗楽で、双竜舞ともいい、恐しい面に桴を持って、二つの竜が楽しげにはねる有様を表わしている。

10.太平楽（たいへいらく）童舞四人
優美で可憐な武人の装束で舞い、その名の通り、乱世を治め、正しい道に直すという意味を表わすめでたい舞である。鉾・太刀を振って、豪壮雄大に舞う。

11.久宝楽（きゅうほうらく）童舞二人
太刀と楯を持って舞う。南方の林邑八楽のひとつで、奈良時代に渡来し、大阪・四天王寺に伝えられたという。

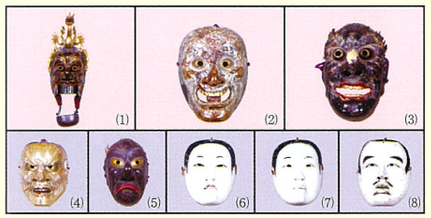
12.陵王（りょうおう）大人一人
昔、中国の蘭陵王が恐しい面をつけて陣頭に立ち、敵を勇壮に打ち破った様をかたどった舞である。赤地金襴の面帽子に竜頭、吊顎の面をつけ、豪壮な装束に緋房のついた細い金色の桴を持ち、落日に舞う。

【解説】 天津神社の舞楽は、俗に「稚児の舞」と呼ばれているが「大人の舞」もあり、ともに特色があり美しいものである。外来舞楽が日本化されて今日の宮廷舞楽が出来上がっているが、天津神社の舞は、この平安朝風宮廷舞楽でもなく能全盛期の室町風とも異なり、敢て言えば鎌倉風とでも言うことになる。神楽や田楽とも又風流踊とも趣を異にして、能や風流出現以前の舞楽的な世界にあって創作された日本の舞であろうと言われる。

県指定文化財

●木造奴奈川姫神像（昭和29年2月10日指定）
奴奈川神社に安置されている小神像の中のひとつである。檜材の一木造りで、彩色が施され双髻を結び、髪を両肩に垂れ、拱手して座る姿である。つくりは簡素ではあるが、神像独自の清澄な表現がみられ、その温和で端正な像容の中に藤原時代の特色がみられる。

●木造女神座像（三軀）（昭和56年3月27日指定）
①この像は、像高27cm、面相は整っている。製作年代は、先の奴奈川姫神像に近い頃のもの。
②この像は、像高33cm。
③面相はやさしく整っている。像高45cm。



●天津神社舞楽面（三面附五面）（昭和56年3月27日指定）
(1)この面は陵王面であり、極めて薄手の作で製作も古い。垂れた顎の部分は後補である。鎌倉時代の作。
(2)この面は抜頭と伝えられる面で、これもかなり古い面であり、室町時代の製作。
(3)この面は納曽利の面と伝えられ、古い面である。唇に朱、眼にも彩色があるが、これはいずれも補彩である。製作年代は室町時代。
(4)これは能抜頭の面と伝えられ、鼻の上の顔料が剥落している。江戸初期作。
(5)この面は納曽利と伝えられている面で、裏に大出是雖作、元禄四年の銘がある。
(6)・(7)児納曽利（2面）。江戸期。　(8)安摩。江戸期。

市指定文化財

●木造奴奈川社随神像（二軀）（昭和47年3月27日指定）
この随神像は、奴奈川神社の随神像である。次の天文銘の随神よりもやや古い製作と考えられる。両足を垂下した姿も古様であるが、両足先は失われている。像高は47cm。

●木造天津随神像（二軀）（昭和47年3月27日指定）
天津神社の二軀の随神には地付部に銘がある。
仏子民部郷法眼　本願代僧秀遍　旦那関東常陸国筑波根住菅谷大蔵太輔紀貞之　天文九庚子　拾月六日
これより、両像が天文九（1540）年の製作であることがわかる。寄木造彩色の像で、随神像中銘のあるものは全国でも稀であるので貴重である。尚、本像には、文政七（1824）年の修理銘もある。

●天津神社本殿（一棟）（平成3年3月26日指定）
説明は前出

●天津神社大懸仏（二面）（昭和48年3月26日指定）
天津神社には多数の懸仏が伝わっている。そのうち大きいものは、鏡の直径が91cmに及び、我国の懸仏中でも最大のもののひとつとして注目されているが、おしいことに仏像を失い鏡だけになっている。裏には大檀那大施主比兵尼妙従干時文安六年奉懸御正体一社越後国沼河保一宮天津社　宮司金玉丸　願主権少僧都日蔵坊良源　六月二十一日敬白の墨書銘がある。また、直径70.5cmの懸仏は楽師如来像の青銅仏を付けている。その他の天津神社に伝わる懸仏はかなり薄手のものが多い。

●石造如来形座像（一軀）（昭和55年4月22日指定）
全高57.0cm、最大幅37.0cm、最大厚14.3cm、像高49.5cmで大きく蓮弁形に象った石材に、定印を結んで薄い框座に座る如来形像を浮彫している。磨損がいちじるしく、顔だちも明らかではないが、まず定印を結ぶ阿弥陀如来と判断出来る。面長で、なで肩のおだやかな表現から、その製作は鎌倉後期頃と考えられる。

●七十五膳
天津神社の神事に「七十五膳」と称する古式ゆかしい特殊な神饌がある。毎年、祈年祭、新嘗祭、除夜祭の当日、各二十五膳の神饌を神前に供え、一年を通じて合計七十五膳を供えるのでこの呼び名がある。
献立ては、白飯一椀（三升の米を焚き、それを二十五の椀に盛る）、餅三個（三升の米で餅をつくり、七十五等分し、それを笏方に整え、三個ずつ白紙に載せる）、鮭一片（鮭一尾の皮を剥ぎ、それを二十五切に輪切りにし椀に盛る）、大根一片（生大根は輪切りにし、それを六角形に整え椀に盛る）昆布一枚（長さ約三寸、巾約八分の短冊形に昆布を切り、縦に一寸五分程の切込みを入れ、椀に盛ってある大根の上に載せる）、以上五種で一膳とし、同様の膳二十五を供える。